

3326 地球のかおり：牛のおなら

今、いろいろ資料を整理中。産経新聞掲載は、下記の文言。たった12行のための下書きの文章が出てきた。たかが一枚のフィルムスケッチだが、読み返してみると興味深い。今回の講演に、作品として紹介したものかどうか検討している。



YouTube 地球のかおりに登場する「牛のおなら」下書き
ニュージーランド、北島最先端レインガ岬を目指した。夜明けのワンション。

南島のクライストチャーチから出発、最南端、インバーカーギルへ。
ミルフォードサウンド経由、サウスランドに沿って北上、
ピクトンからフェリーで、南島、風の強いウエリントンへ。

この旅も相当な時間が経過している。

慣れもあり気持ちの余裕もある。オークランドで英気を養い、
しゃれたカウンターバーでの知人との出会い、北島の有難い情報も得られた。

都会と秘境、このギャップが面白い。

後半の旅のスタート。まず、北島最先端のレインガ岬を目指した。
復路、右に左に道草をすればいい。
最北端からの北島南下を取材行脚。時間も充分にある。

北島のノースランド、オークランド辺りから細長い半島となり、
300キロ以上も北に伸びている。その最先端がレインガ岬。気候温暖。
海岸線も美しい。途中、魅力ある出会いもあったものの、
最小限にとどめ、まず、レインガ岬へ。

南太平洋のタヒチ方面から、大型のカヌーをあやつってやって来た
マリオ族が、この地に居を構え、独自の文化を育んだ由。

大航海時代、クック船長が上陸したのも、このノースランド。
人を惹きつける定めや魅力があるのかもしれない。
夢とロマン、気候温暖の地。
あらゆる種類の果物が、たわわに実る土地。期待が膨らむ。

レインガ岬、近辺に宿はなさそう。情報を詳しく調べない。
先入観や固定概念を持たない旅のスタイル。実に気分的に解放される。
自由。これが何よりも有難い。しかし、緊張感はある。
地図上でこの辺りに泊まれば、何とか早朝には訪ねられるだろう
というポジション。しかし、まだかなりの距離があった。

いつものように、朝駆け。暗い内から出かけた。真っ暗だった。
どのあたりまで来たのだろうか。闇に、少し光が差してきてしまった。
レインガ岬の夜明けには間に合わない。予想以上の時間。
辺りに家も見当たらない。街の灯りもない。森や林の中に住人がいるのかも。
無人のような雰囲気。道が続く。

早朝というより、夜中にスタート。いずれにしても一呼吸。
車外に出て一休み。美味しい空気を吸うことにした。
しばし、休憩という次第。昨日買っておいしたパンでも口にしようか。

のどもすこし乾いてきている。水分補給。この時の一口の水は実に美味しい。
心身も健康。それが何よりも有難い。

だんだんと夜が明けてくる。ぼんやりと、ぼやけた風情が何とも良い。
日本人の美意識かも。最初は何とも言えない田園のかおり。
やがて、眼下ののどかな光景が、明るさとともに、眼前に現れた。

刻々と変化する自然を観る楽しみは最高！
鮮明に見えないから面白い。どこかで見たような絵画の光景。
フランス、ミレーの晩鐘、バルビゾン？

眼前の光景は、静寂そのもの。朝霧なのか、たなびいている。
心安らぎ、心が癒される。身も心も落ち着いてくる。よく見ると、牛の群れ。
この辺りの草は豊富。牛たちはのびのびと朝食？をとっている。

朝露で足元は濡れている。ニュージーランドは危険な動物も、
草花もないという認識がある。気持ちが解放されている。霧走る放牧の地。

動きのスピードが増してきた。ある時点から早くなる。
このプロセスが実に楽しい。寒さもなんのその。眼前の光景に感動して、心を
奪われていた。同じ光景は二度と見られない。

素晴らしい感動の自然との関わりは、至福の時間。無我夢中。

今、誰もいない。久楽たった一人。静寂そのもの。風が少し。
地球が活動を開始したのかもしれない。高い位置の霧？が動き始めた。
消えていくのか、どこかに移動するのか。

明るさが増してきている。無数の牛たちが次々と現れてくるような錯覚。
時間としてはそう長くない。その展開は、スローモーション。
よそ見をしていると場面が変わる。
自然のワンマンショー。自然は大芸術家。同じ場面がない一期一会のシーン。

突如、ジャーという水の音？ 実に勢いのよい音。大げさでなく
その音は長く続いた。音の出る方向に目を向けた。

無粋な話で恐縮。それは、牛のおしっこの瞬間。実に子気味のいいスピード。
実に気持ちよさそう。この作品の手前の右にも映っている。
そんな時間帯なのか。連鎖反応なのか。耳をすますと、次々と時間差で…

のどかな時間が過ぎていく。耳ざわりではない。
むしろ、好ましくさえ思える。セツチン（おトイレ：雪隠）俳句が脳裏に。
「天国はどこにあるかと尋ねれば、こらえこらえし、ションの出る時」

牛は、さぞかし目を細めているだろう。
牛のおしっこが、こんなに勢いよく、長い時間とは知らなかった。

人間様より体が大きいのは確かである。牛の胃袋は4つある。
爽快そうな牛の様子、こんな目撃や出会い。子ども心に戻って楽しむ時間。
世の中、知らないことが実に多い。

余分なことは知らない方がいい。久楽の好奇心は際限がない。

これからも鈍感でない、感じる人間でありたい。
気がつかないだけ。日頃、心の余裕がないだけかも知れない。
そんなに急いでどこに行くのか、という言葉。

そうした状況にある人もあるのかも知れない。日本人が世界に誇れるもの。
西洋人が認めるものに、日本人の美意識。いまも、そうだろうか？
環境が人を育む。素敵に日本語、日本文化の数々。

またまた、話が脇道へ。元に戻して、勢いがすごい。
静寂の中なので強く感じる。このションの音で、光景が思い出深くなった。

しばらくして、田園のかおりも変わった。近づきすぎたのか。風下？
光景も変わった。朝霧は幻だったのか、存在していたのか。
乾燥した土の国。無機質な土地ただただに余分なことまで思ってしまった。

夢中で、夢を追いかけ、夢に命を取られるかもしれない。
夢中になれる今が、一番幸せなのかも…

車に戻ると、靴は朝露に濡れて、草花や土や泥が入り混じってドロドロ。
味噌も糞も一緒ではないが、運が少しついていた。
たかがワンシーンの思い出。されど、思いが広がる。久楽は旅人。

これから、北島の最北端レイнга岬へ。
ひとときの夢、幻。まぼろしに終わらず、作品が残った。
デフルメして描く絵画ではない。
写生画のような現実の描写。和紙夢絵にしてアトリエに飾る予定。

タイトルは「牛のおなら」でよかったのか。
朝霧はガスだったのか。牛のションなのか、今少し、品よく、
美的なタイトルをつければよかったのか。

1週間もかかってしまった。
どうもそんなバイオリズムになっているようだ。
ひらめきで決まることが多い。たかがタイトル、されどタイトル。
3秒、3分、30分

講演準備も、うまくいくときは早いのだが、
ぎくしゃくギクシャク、何事も思い通りに行かない四苦八苦。
リズムを変えて頑張りたい。

新聞記事では、「牛のおなら」

ニュージーランド北東のオークランドから、
北端のレイнга岬を目指す途中、
道の切れ目から牧場が見えた。なんとも言えない田園のかおりがする。
次第に明るくなり、ぶ厚い靄が動き始める。

同じ光景は二度と見られない。牛たちの姿が見えたと思ったら、
ジャーという派手な音が。牛の放尿音。
さては、このもやの正体は「牛のおなら」だったのか、
そんな楽しい想像が頭に浮かんだ。